

ブックショートアワード

10月期応募作品

○作品タイトル

『口内炎が、消えた朝』

○著者名

山口 耕平

○あらすじ（140文字以内）

西野洸太（27）がある朝、目を覚ますと、昨日まであった口内炎が消えていた。痛みがなくなり、上機嫌で職場に向かった洸太は、昼休みに仕事の愚痴を話す同僚たちに、自分は口内炎が治ったから幸せだと返し、呆れられる。でも、その言葉には、洸太なりの深い想いがあつた。

○本編の文字数

13枚 3583文字

へ人物表へ

西野 洸太	(2 7)	紫水グリーンテック	・社員
木下 亮一	(2 7)	〃	・社員
寺本 桜	(2 7)	〃	・社員

女性の先輩 1、2

○ 洗太の家・外観（朝）

ファミリー向け賃貸アパート。
建物に朝日が当たっている。

○ 同・寝室（朝）

カーテンの端から漏れる朝日で少し
明るくなった部屋。

ダブルベッドの片方に寄って、一人
眠っている西野洗太（27）。

洗太は左手の薬指に指輪をしている。
スマホのアラームが鳴り体を起こす。

洗太、アラームを止めながら、寝ぼ
け眼で、口をもごもごとして

洗太「（眼を開き）ん、ない……なくなっ
た！（伸びをしながら）やったー！」

とベットから降り、寝室の扉を開き
洗太「明香ー口内炎なくなった！ 今日は一
んかいいことあるかも」

と、扉の向こうに声をかけながら、
出ていく。

○ 田舎の道（朝）

田んぼの中の道。

会社の従業員用バスが走っている。

○ 同・バスの中（朝）

混み合うバスの中、座席に座る洗太。

洗太、ふと、口の中をもごもごとして、笑顔になる。

少し離れた場所に立ち、その姿を見ている寺本桜（27）。

桜「？」

○ 紫水グリーンテック本社・前（朝）

事務所兼工場の建物が建ち、車寄せがある。

従業員用バス、来て、車寄せに入っていく。

○ 同・オフィス

自席で仕事をしている洗太。

近くの席で女性の先輩2人がメールをプリントしたのを見て話す。

先輩1 「これ、絶対キレてるよね」

先輩2 「間違いなく……私、電話したくない」

先輩1 「え、私もいやだよ……」

先輩2 「うーん、どうしようか……」

先輩1 「そうだねえ……」

と、先輩1、2、洗太の方を見る。

洗太、二人の視線に気づかず、口の中をもごもごして、笑顔になる。

先輩1 「(洗太に) 西野くん、なんか楽しそうだね」

洗太 「！ あ、いや……すみません」

先輩1 「別にいいんだけどさ……」

洗太 「……なんかありましたか？」

先輩2 「お客さんから怒りのメール来てて、対応どうしようかと思って」

先輩1 「怒鳴られるの、确实だからさ……」

洗太 「……僕、電話しましたよ？」

先輩1 「えっ！　ほんと！？」

先輩2 「でもこれ、うちの担当だけど」

洗太 「いや僕、今日ついてる感じなんで、大

丈夫だと思えます」

先輩1 「まじで？　じゃあ……」

先輩2 「お願いしていい？」

×　×　×

電話をしている洗太。

それを固唾を飲み見守る先輩1、2。

洗太 「ええ、本当に申し訳ありません。おつ

しやる通りで……はい、まさに」

先輩1 「（小声）なんか、いけそうじゃない」

先輩2 「（小声）うん……」

洗太 「（焦り）え！　ええつと、私はですね」

先輩1、2 「！」

洗太 「（焦り）ちよつ、ちよつと……」

大声になった相手の声、周りに響く。

相手（声） 「担当でもないくせに、なに電話

してきてんの！　あんたじゃ話にならない

い！　すぐに担当を出しなさい！」

洗太「（焦り）えーつと……」

先輩1「やっぱダメか……」

○ 同・社員食堂

洗太、桜、木下亮一（27）が一緒に食事をしている。

洗太のメニューはピリ辛肉味噌定食。

桜「で、そこから1時間もかかったの？」

洗太「うん、そう……ちょー怒ってた」

亮一「そりゃそーだろ。下手に受けんなよ。

うまいこと仕事振られてんだよ」

洗太「そうなのかな……」

亮一「また今日も残業になるぞ」

洗太「今日は帰る。用事あるし……」

桜「そもそも、ちゃんとした対応部署がないのが悪い。私もこないだ怒られたし」

洗太「組織が悪いな。広報資料なんか決裁に20人もいてダメ出しの嵐だし」

桜「田舎なんだし、もったのんびり働きたい

……都会と同じストレスなら、こんな不

便なところで暮らしてる意味なくない？」

亮一「確かに……いっそみんなが都会の会社に転職すつか。なあ、洗太もどうよ？」

洗太「うーん。僕は別に……」

桜「1時間も怒鳴られたのに？」

洗太「いや、今日僕、ついてて」

亮一「どこが？」

洗太「（少し興奮し）あのさ、今日起きたら、昨日までであった口内炎が消えてて」

亮一「は？」

洗太「いや、唇のすぐ裏にあったやつで、ご飯食べる時めっちゃ痛かったんだけど」

桜「（呆れて）……」

洗太「あ、ちよと見る？　口内炎の痕跡」

と口を開けようと唇を掴む。

桜「（強く）絶対やめて！　食事中」

洗太「（残念そう）あ、そう……」

亮一「てか洗太って、高校の時からよく口内炎になってなかったっけ？」

桜「確かに。年に2、3回、お弁当食べなが

ら痛がってたイメージある」

冨太「そういう体質なんだよ、多分」

亮一「その度に薬買ったよな。あの、高校の前のボロボロの薬局で」

桜「あーあった！ 薬剤師が怖いとこね」

亮一「なんか一回、冨太が時間なくて。明香に薬買ってもらったら、思ってたのと違ってて、喧嘩になってたよな」

冨太「いや、あれは、パッチタイプが欲しいのに、塗り薬だったから。パッチじゃないとダメだから。患部を守るためには」

桜「そんな口内炎あるある、普通の人は知らないし。明香かわいそーだったよな」

亮一、冨太の食事を見て

亮一「え、もしかして。今日、ピリ辛肉味噌定食食べてるのって口内炎治ったから？」

冨太「そう！ この1週間、ずっと食べたかったから、今日はちよー幸せ」

と、もぐもぐと食べ進める。

亮一と桜、目を合わせて「やれやれ」

という表情をする。

天井のスピーカーからアナウンスが流れる。

アナウンス「本日、9月17日は、紫水大豪雨災害から3年目にあたります。当社の職員やご家族が犠牲となり、また、本社工場も3ヶ月間の操業停止に見舞われたこの災害を忘れないよう、社長から節目にあたってのお言葉を放送します」

アナウンスを聞いた3人とも、少し神妙な顔つきになり、箸が止まる。

桜「！ そっか……もう3年か」

亮「そうだな……早いな」

洗太「……」

桜「……洗太は今年もいくの、あそこ？」

洗太「うん……もちろん」

桜「私も行こうかな……」

亮「……じゃ、俺も」

無言で食事を再開する3人。

社長の言葉が放送されている。

○紫水大豪雨伝承公園（夕）

大きな川のほとりにある公園。

公園内に小高い丘があり、丘の上に

大豪雨伝承碑が立っている。

丘の上の広場を囲む手すりに手を置

きながら話す洗太、桜、亮一。

洗太が中央で、その左右に桜と亮一。

視界には夕暮れの中、静かに流れる

大きな川と田畑が広がる。

桜「（しみじみと）あの時は大変だったね」

亮一「会社も家も、全部水に浸かって……」

桜「食べ物はないし……」

亮一「避難所のトイレは汚いし……」

洗太「……」

桜「ほんつと、苦労した。あの時と比べたら

……今は平穏な毎日なのか？」

亮一「うーん、でも……今は今で大変だろ？

それなりに」

桜「ま、そりゃそうだ……」

冨太「……」

桜、なにも話さない冨太を見て。

桜「（やさしく）冨太、大丈夫？」

冨太、景色を見たまま話す。

冨太「うん……大丈夫」

亮も冨太を見て

亮「……」

冨太「結局さ……口内炎と一緒にだよね」

桜「！（おどけて）亮、冨太がまた変な

こと言い出してますけど……」

亮「ま、それが冨太のデフォルトだから」

冨太「違うよ。ほんとに、真面目に……」

桜「……」

冨太「今日さ、僕の口から口内炎が消えてな

くなった。昨日まであつて、あんなに嫌

だったものが。だから今日は幸せ」

亮「……」

冨太「で、多分明日も、朝起きたら思う。今

日も口内炎がない、ラッキーって」

桜「……」

洗太「でも、明後日。いや……明々後日くらいには、忘れちゃう。僕の口に口内炎があつたことなんて」

亮一「……」

洗太「それで、朝起きてただ……ああ、今日も会社行かなきゃ、って思うようになる」

桜「……」

洗太「口内炎がないことって、僕にとって、ちょー幸せなことだったはずなのに……」

亮一「……」

桜「洗太……」

洗太「いつもと同じ朝……当たり前前にいる大切な人とか街が、なくなった時に、初めてその尊さに気づく……」

桜「……」

亮一「……」

洗太「勝手な生き物だよ。僕らって」

洗太はずっと風景を見ている。

話しかけられない亮一と桜。

陽が沈んでいく。

○公園の近くの道（夜）

話しながら歩く桜と亮一。

亮一「一人残して、大丈夫だったかな」

桜「大丈夫：：一人でいろいろ考えたいこともあるだろうし」

亮一「そうだな：：」

桜「：：あー、明日も仕事か」

亮一「ああ、明日も仕事。いつもと同じ」

桜「そうだね：：いつもと同じ朝：：」

○洗太の家・外観（日替わり・朝）

建物に朝日が当たっている。

○同・寝室（朝）

カーテンの端から漏れる朝日で少し明るくなった部屋。

昨日と同じようにダブルベッドの片方に寄って、一人眠っている洗太。スマホのアラームが鳴り体を起こす。

洗太、アラームを止めながら、寝ぼけ眼で、口をもごもごとして

洗太「（眼を開き）よし！ 今日もない！」

とベットから降り、寝室の扉を開き

洗太「明香ー」

と、部屋を出ていく。

○同・リビング（朝）

誰もいない、朝日で少し明るくなっている部屋。

洗太、入ってきて、電気をつけ

端に置かれた棚の前に行くと笑顔で

洗太「明香、今日もきつといい日になるよ」

と棚の上の女性の写真に話しかける。

写真の前には指輪が置かれている。

洗太、笑顔のままキッチンにいき、

一人、朝食の支度を始める。

〈完〉